南方における近代日本青年たちの足跡・研究会

研究代表者：塩 山 正 純（国際コミュニケーション学部）
共同研究者：加 納　 寛 （国際コミュニケーション学部）
岩 田 晋 典（国際コミュニケーション学部）
須 川 妙 子（短期大学部）

１．はじめに

近代日本においては「南進論」が重要な思潮の一つであり、とくに1930年代以降は具体的な政策として本格化し、ひいては「大東亜戦争」へと結びついていった。しかし、「南進論」の対象地域である台湾・華南・東南アジア等における実際の日本人の動向については、満州や華北でのそれに比べ、研究者の関心をひいてこなかった。

そこで、本研究プロジェクトでは、20 世紀前半の日本人の近代アジア経験を多様な角度から体系的に理解する作業の一環として、主として東亜同文書院（1939 年から大学）の書院生が卒業前に行った「大旅行」調査の旅の記録としての『大旅行誌』の記述に焦点を当て、従来ほとんど研究されてこなかった広東・福建・台湾・東南アジア、すなわち本研究で言う「南方」における書院生の体験を、訪問エリアと学術・言語・生活・観光という異なる経験相（テーマ）毎に分析し、近代における日本人青年と“アジア”の接触の実像を浮き彫りにすることを目的として調査と考察を行い、現在も継続中である。

さらに、本プロジェクトでは、当該テーマの研究における文献・記述検索の利便性の向上をはかるべく、台湾・華南・東南アジアで近代日本青年たちが実際に残した足跡について、すでに資料価値の定まった史料として東亜同文書院生による『大旅行誌』を取り上げ、移動の軌跡と彼らが訪問先で見聞した具体的事象に関する記述をGIS技術によって整理し､｢近代日本青年の足跡｣データベースを構築することも当初の目的に掲げ、個別のデータ入力作業を継続してきた。名古屋校舎の研究室移転等の幾つかの事情により作業は遅れ気味であるが､2017年に入ってようやく名古屋校舎の研究室環境も落ち着いたことから、今後の継続的研究のためにも有用かつ不可欠の作業と位置づけ、今後も継続して取り組む予定である。

本プロジェクトでは、重要な成果物として位置づける上記データベースの作成作業を継続的に行うと同時に、これを作成する過程における各自のエリア研究（香港、大陸南部、台湾、東南アジア）と個別テーマ研究（観光、食、言語、宗教等）の成果を論文・口頭発表で公表した。本プロジェクトの実際の作業・考察については、塩山が全体統括と香港・言語を、岩田が台湾・観光

を、須川が雲南・食を、また加納が測量士として培ったGIS技術を各共同研究者に共有するとともに東南アジア・宗教（台湾における神社）を担当した。

２．本プロジェクト（含・科研基盤研究（C））による成果

本プロジェクトは「1. はじめに」で述べた目的に沿って個別の研究を行い、その成果を現時点までに以下の通り論文、口頭報告によって発表してきた。

2.1 論文等

塩山正純（専門分野：中国語学）

（1）『大旅行誌』の思い出に記された香港―大正期の記述を中心に（加納寛編『書院生、アジアを行く　東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』（あるむ））

（2）東亜同文書院生の台湾旅行にみる「台北」像（愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』38号）加納　寛（専門分野：歴史学（東南アジア史））

（3）書院生、東南アジアを行く!!：書院生の見た在留日本人（加納寛編『書院生、アジアを行く東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』（あるむ））

（4）東亜同文書院生の台湾旅行にみる神社の位置付け（愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』38号）岩田晋典（専門分野：文化人類学・旅行文化論）

（5）大調査旅行における書院生の台湾経験―“近代帝国”を確認する営み（加納寛編『書院生、アジアを行く東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』（あるむ））

（6）東亜同文書院大旅行調査と植民地台湾：書院生が経験した「日本」（愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』34号）

（7）東亜同文書院生の植民地観と台湾：『大旅行誌』における植民地主義言説に関する試論（愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』38号）須川妙子（専門分野：家政学（食品・食物））

（8）『東亜同文書院大旅行誌』の食記述にみる書院生の心情変化―「雲南ルート」選択の意義を探る（加納寛編『書院生、アジアを行く東亜同文書院生が見た20世紀前半のアジア』（あるむ））

（9）『東亜同文書院大旅行誌』の食の記述にみる近代日本青年のアジア観―台湾の例―　（愛知大学国際コミュニケーション学会『文明21』38号）

2.2 口頭報告等

塩山正純（専門分野略）

（10）言語から見た大旅行：書院生のことばへのまなざし（愛知大学国際コミュニケーション学会シンポジウム「100 年前のアジア旅行～東亜同文書院「大旅行」と近代日本青年～」2017 年 2 月 11 日（愛知大学名古屋校舎））

（11）南方における近代日本青年の足跡・研究東亜同文書院『大旅行誌』の記述にみる香港・台湾・南方（愛知大学人文社会学研究所プロジェクト・研究会公開報告会（愛知大学豊橋校舎））加納　寛（〃）

（12）東南アジアにおける「大旅行」ルートと日本人社会（愛知大学国際コミュニケーション学会シンポジウム「100 年前のアジア旅行～東亜同文書院「大旅行」と近代日本青年～」2017 年 2 月 11 日（愛知大学名古屋校舎））岩田晋典（〃）

（13）東亜同文書院「大旅行」調査に見る近代日本青年の「南方」体験：中国人コミュニティーとの接触の実像（国際シンポジウム「文化· 文学 : 历史与记忆国际学术研讨会」2016 年 6 月 25 日（中国・大連理工大学、塩山正純・加納寛・須川妙子との共同発表））

（14）観光から見た大旅行：台湾の事例（愛知大学国際コミュニケーション学会シンポジウム「100 年前のアジア旅行～東亜同文書院「大旅行」と近代日本青年～」2017 年 2 月 11 日（愛知大学名古屋校舎））須川妙子（〃）

（15）食から見た大旅行（愛知大学国際コミュニケーション学会シンポジウム「100 年前のアジア旅行～東亜同文書院「大旅行」と近代日本青年～」2017 年 2 月 11 日（愛知大学名古屋校舎））

３．成果概要（１）エリアの考察

エリアに関する考察としては以下の三点にまとめることができる。

3.1 香港

東亜同文書院生による『大旅行誌』における香港滞在中の記述を通して見えてくる事象を、１）見どころと街並み、２）宿泊と飲食、３）交通機関、４）訪問と面会の記録すなわち日本人コミュニティーとの接触、５）在留日本人・中国人・イギリス人へのまなざしすなわち各々の社会、植民地経営への言及などのカテゴリーに大別し、同時代の日本人の記述との比較対照によって、近代日本青年による「香港」像を考察した。考察の詳細については成果（１）参照。

3.2 台湾

メンバー全員による研究対象のエリアとして台湾を選択し、東亜同文書院生による『大旅行誌』台湾ルートの記述から、「首都」としての台北像、台湾各地に造営された神社の信仰・観光の対象としての実像、植民地台湾における「日本」的なもの、台湾における食に関する記述の概要についてそれぞれ考察した。個別の考察の詳細については成果（２）（４）（５）（６）（７）（９）参照。

3.3 東南アジア

大旅行調査のルートとしては 54 路線を数えるものの他エリアに比して、従来注目されて来なかった東南アジアルートと各訪問地での在留日本人との接触について、『大旅行誌』の記述を中心資料として考察し、『大旅行誌』が当時の東南アジアと日本との関係を見るうえでの重要な資料の一つとなる可能性を指摘した。考察の詳細については成果（３）参照。

なお、須川による「雲南ルート」に関する考察については、テーマ「食」と重複があるため詳細に関する記述を省略する。

４．成果概要（２）テーマの考察

また、テーマに関する考察としては以下の四点にまとめることができる。

4.1 食から見た大旅行

大旅行調査が実施された時代は、日本国内においては食糧事情が安定し、食への関心が高まり、嗜好品摂取が習慣化し、外食が広まった時代でもあった。本テーマの考察では、『大旅行誌』の食に関する記述を通して、訪問地での現地食が連続したあとの伝統的日本食、目的地到着の楽しみとしての西洋的嗜好品、現地邦人・先輩諸氏による接待時に振る舞われた伝統的日本食など、総じて「艱難辛苦をともなう調査旅行の道中におけるささやかな安らぎ・楽しみ」としての日本的、西洋的な食習慣への執着であった点を指摘した。考察の詳細については成果（８）（９）参照。

4.2 観光から見た大旅行

『大旅行誌』の台湾ルートの記述を資料として、大旅行調査を観光というキーワードから考察したものである。近代の世界規模でツーリズムが展開されつつあった時代に行われた大旅行調査がいわゆる学術調査一辺倒ではなく、我々現代人が「観光」と称する文化的行動をすでにかなりの程度で行っていたことが『大旅行誌』の記述から見てとれた。台湾ルートにおける経

験には、１）日本らしさ、２）近代的なもの、３）蕃人との接触、４）南国らしさ、５）名所旧蹟の訪問に大別される種々のカテゴリーの内容が含まれたが、「観光」的要素が含まれるその背景には、上述の 4.1 でも言及した「艱難辛苦をともなう調査旅行の道中におけるささやかな安らぎ・楽しみ」の享受といった側面があることが指摘される。また、こうした観光スタイルは 20、30 年前の若者のアジア旅行と類似するものであった点も指摘された。考察の詳細については成果（６）参照。

4.3 言語から見た大旅行

中国の言語、現在日本でいうところの「中国語」を外国人がどのように捉えてきたのかについては様々な研究があるが、本テーマでは中国の専門家として養成された東亜同文書院生が『大旅行誌』でことばに関して記述した事例をあつめ、彼らが中国各地で見聞きした官話の諸相、現地人との会話の記録、言語接触の事象について考察した。考察の詳細については成果(10)参照。なお本テーマに関する考察の一部成果を愛知大学国際問題研究所叢書（近刊）に投稿済みである。

4.4 宗教・信仰から見た大旅行（神社）

『大旅行誌』台湾ルートの記述から、台湾における神社に対する「内地人」青年のまなざしについて考察したのもので、台湾における神社は観光に組み込まれたスポットであり、1910 年代までは神社訪問とリンクして抗日鎮圧の功労者としての北白川宮が想起されるという特徴があったが、その後増加する神社が内地人観光のルートに組み込まれていく一方で、1920 年以降は北白川宮の事績が「内地人」青年の感慨を催させるものではなくなり、すでに過去のものになりつつあったことを指摘した。考察の詳細については成果（４）参照。

５．成果概要（３）GIS を活用した可視化の試み

本プロジェクトのメンバーの個別研究において蓄積してきた移動路線・訪問地点などのエリアデータとテーマ別データを Arc GIS を利用することによって図表として可視化する試みにも着手している。本プロジェクトの研究期間が名古屋校舎所属メンバーの研究室移動などと重なり、当初計画の通りには進捗していないが、2017 年 2 月には新研究室の環境がようやく落ち着き、Arc GIS のシステムをインストールした共同パソコンが安定的に使用できるようになったことから、以下に紹介する一部成果の要領で、本項目についても継続的に成果を積み上げていく予定である。

（図表１）東亜同文書院・大旅行調査　東南アジア路線の移動経路

（図表２）Arc GIS の基礎データとしての「台湾における神社鎮座数推移」表

表1 台湾における神社鎮座数推移

鎮座年(1)	官幣大社	官幣中社	国幣小社	県社	郷社	無格社	護国神社	社	末社	遥拝所	その他(2)	計
1897～1900	0	0	0	1	0	0	0	3	0	0	0	4
1901~1905	1	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2
1906~1910	0	0	0	1	0	0	0	2	0	0	0	3
1911~1915	0	0	2	2	1	3	0	3	0	0	1	12
1916~1920	0	0	1	2	0	2	0	6	0	0	0	11
1921~1925	0	1	0	0	0	2	0	16	0	0	4	23
1926~1930	0	0	0	1	1	2	0	31	0	1	2	38
1931~1935	0	0	0	0	5	1	0	38	0	0	22	66
1936~1940	0	0	0	2	12	16	0	17	1	0	44	92
1941~1945	0	0	0	0	1	6	1	0	11	1	17	37
不明(3)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	7	108	115
計	1	1	3	10	20	32	1	116	12	9	198	403
大別計	68							335				403

（図表３）上記・図表２を基礎データとする Arc GIS による可視化の一例

６． 今後の展開

以上の成果を踏まえた今後の展開としては、以下の幾つかのプランを計画している。

１）この間収集してきた当該テーマに関係する書籍、論文、写真、雑誌・新聞記事等の資料を整理し、神奈川大学非文字資料研究センターの取組みをモデルとして、研究者・学生が利用できるデータベースの作成。

２）2015 年度の現地調査と 2016 年度『文明 21』38 号特集に掲載した成果に基づく近代の日本人の台湾経験に関する解説本の刊行。

３）東亜同文書院大旅行調査の調査対象地となった東南アジア諸都市（個別）における近代日本人の足跡（エリア別、テーマ別）の考察。

４）Arc GIS を活用した路線・地点の空間移動と観光・食・言語その他テーマ別のデータ蓄積と公開。